

## 論文の内容の要旨

論文題目      Potential of Local Initiatives for Agricultural Development in Africa:  
Researches on Livelihood and Natural Resource Management of the Central  
Nigerian Rural Community

(アフリカの農業開発におけるローカル・イニシアティブの可能性：  
ナイジェリア中部の農村地域コミュニティにおける生業及び自然資源  
管理に関する研究)

氏名            ふ      ほういー  
                 傳      凱儀      FU, HOI YEE

アフリカの貧困問題を解決する上で、最も重要な事は農業の成長であると考えられている。しかし、国際機関による絶え間ない介入にも関わらず、アフリカの農業生産は未だ不振にあえいでいる。アフリカ農業に対する一般的な見方といえば、生産性が低く向上意欲の乏しい小農が主体となっており、またその生産法は未だ原始的で、自然資源が不効率に利用されてしまっている、と否定的である。停滞したアフリカ農業に対する従来の対策は、投入材の供給、市場の自由化、専門家主導の介入戦略に焦点を当ててきた。しかし、これらのアプローチは、ローカル・イニシアティブの可能性と小農が成し遂げてきた成果を適切に評価していない。アフリカ農民は変化に抵抗するという固定観念に反し、彼らにはローカル・イニシアティブを生み出す事で農業経営、自然資源管理及びコミュニティの生活を改善させる能力が備わっている。ローカル・イニシアティブは地域の農業生態的、社会経済的及び文化的条件と適応する。本研究では、ナイジェリアの農村地域コミュニティによって構築されたローカル・イニシアティブを検証するために、ナイジェリア中部におけるヌペ農民とフラニ遊牧民を調査対象として2004～2012の間に断続的なフィールドワーク調査を行った。参与観察、非構成的・半構成的インタビュー、アンケート、日記記録及び土地測量を含む複数の調査方法を採用した。

第一章では、コミュニティ経済と小農経済における経済人類学の概念を整理する。経済人類学の観点における経済には、市場とコミュニティの両領域が含まれる。アフリカの小農経済は、コミュニティ領域に支配されており、そこでは個人が社会的依存と義務の網に組み込まれ、モノと資源が複雑な社会関係と帰属を通じて交換される。コミュニティの土

台となるのが「ベース」であり、これには自然資源、土着的知恵や社会ネットワークなどのコモンスが含まれる。コミュニティの間では、互酬を通じて別のコミュニティをベースの利用者に含める事で関係を築く。アフリカの小農社会は、まだ完全に資本主義と国家管理に捕捉されていない。小農の経済行動は生存維持と互酬の原理によって導かれている。ナイジェリアの小農社会では、労働形態と自然資源管理を司る伝統的な制度が未だ存続しており、小農が生産要素である土地と労働に対するある程度の支配を保持している。

第二章は、調査を行った農村コミュニティであるヌペ農民とフラニ遊牧民が暮らす、ナイジェリア中部のビダ王国のカドゥナ川以東の地域に関する詳細を記述した。この調査地はギニアサバンナ地帯に属し、4月～10月が雨期で、1月～3月が乾季である。調査地は複数の河道に囲まれており、狭い範囲に高地と低地を含む特殊な地形を有している。フラニ貴族による旧ヌペ王国の征服と、十九世紀のフラニ王権の成立が、現在の二元的な統治制度と多層的な土地所有の発生をもたらした。

第三章は、ヌペ農民の農村生活と農業経営に関する民族学的な記録である。調査地では多数の村が二十世紀初頭における征服者の元奴隷や被扶養者であった移住者によって築かれた。ヌペにとって農業とは主に食糧自給のために行われるものである。異なる水文及び気象の環境に適応する多様な作物と品種を栽培する事で、農民は年間を通して十分な食糧供給を確保する。ヌペ村落の事例研究からは、農民の農地は面積が小さく、分散している事が分かった。確立された社会ネットワークを有する家長農民は、十分な土地を確保するために、周囲の村落にいる複数の地主から借土する傾向がある。コミュニティ労働という伝統的な制度は、高齢の農民にとって重要な労働力提供となっている。

第四章は、一つ目のローカル・イニシアティヴの事例を解明する。調査地では、湿地帯は半世紀前には殆ど利用されなかった。現金に対する需要が高まる中、米と裏作を栽培する低地農業の重要性が徐々に増してきた。ヌペ農民は地域の資源を活用し、低地において土着灌漑及び換金作物栽培の規模を徐々に拡大してきた。九十年代からハウサ商人がヌペから裏作物を買付けるようになり、ヌペの低地栽培の規模が更に拡大した。伝統的な土地制度は、低地農地の蓄積を防止してきた。調査対象となった灌漑システムの農地は、複数の村落の農民によって利用・管理されていた。インフォーマル的な共同管理の効果は、地主の関与度合いによって大きく左右される。用水権に関する明確な定義は無いものの、水不足の際には、水の輪番が行われる。利用者間で水を巡る争いはしばしば発生するが、下流利用者からの要求があれば上流利用者は合意された期間において水を流さなくてはならないような社会的制約がある。

第五章は、二つ目のローカル・イニシアティヴの事例を解明する。本章では、ヌペ農民が市場価値の高い外来作物であるヤムイモの営農体系と食生活に取り込む状況を究明する。三十年代に民族学者がヌペ地域を訪れた際、ヌペはヤムイモを栽培していなかった。早生品種を選別するという農民の自発的な努力で、ギニアサバナ地帯でのヤムイモ栽培が可能になった。八十年代以降ヤムイモに対する需要が急速に高まり、ナイジェリアの中央地帯は次第に南部諸州に取って代わり、アフリカのヤムイモ生産の新たな中心となった。ヤムイモは、ヌペが自らの作付け体系に換金作物として取り入れ、特に低地を持たない高地村落では多く栽培されている。規模は小さく、また歴史は浅いものの、多様な品種及び多岐に渡る栽培形態が発見された。ヤムイモはヌペの伝統文化において特に重要ではないが、その高い市場価値と味の良さから、重要な人物や行事に対する贈り物として利用される機会が増えている。

第六章は、ヌペ農民とフラニ遊牧民の間における自然資源利用の相互依存関係を検証する。十九世紀のフラニ王権の成立後、遊牧民は徐々にヌペ地域に浸入し始めた。彼らはビダ王国の少数民族であり、伝統の畜牛生業を営んでいる。現行の土地所有制度の下では、遊牧民には土地利用の権利が保証されない。彼らは、農民との間で互酬関係、いわば「囲い契約」を結ぶことで、資源へのアクセス権を確保する。囲い契約とは、遊牧民の土地利用権と牛の糞尿堆肥の交換取り決めである。農民は贈り物・サービスを遊牧民に与え、牛が収穫後の田畑や休耕地で採食することを許す。本調査では、遊牧民グループが異なる戦略を採用し、囲い契約を通じてヌペ村落と社会関係を維持してきた事を示唆している。複数の村との関係を巧に操れるグループもあれば、特定の村との、より安定した関係を望むグループもある。社会地位が高く、信用されたグループは囲い契約の取り決めにおいて高い交渉力を有する。しかし、村落を選定するにあたって農民との社会関係が常に重視される。困難に逢った農民を助け、争いを避けるために意図的に村の間、または農民の間に輪番でキャンプを設置することがある。村の農民が総力を結集して遊牧民を誘致し、肥沃となったキャンプ跡地を共有するという事例も見られる。囲い契約は、農民と遊牧民双方にとって生活維持のための重要な手段である。

第七章は、三つ目のローカル・イニシアティヴの事例を解明する。フラニ遊牧民の土着的放牧慣行を究明する。政府が牧畜民に対して放牧地を提供しないことから、ナイジェリアの牧畜民は放牧地にアクセスするにあたって農民との協力関係を頼りにしている。調査地では遊牧民はヌペ社会の忍耐と受容に依拠し自然資源にアクセスする。フラニ遊牧民は一年を六つの季節に分けており、彼らは常に五つの要素、即ち採食地の選定、キャンプの移動、放牧時間、畜群のサイズ、牧童の数を調整しながら牧畜活動を行っている。遊牧民

は異なる季節毎に生える多彩な食草、及び収穫後の農地の残存物を活用するために常に採食地を選定する。食草などの量が不足する場合は、放牧時間を延長し牛群を分割することでわずかに残っている分散した食草を効率的に利用できるようにする。牛群による田畑への侵害はヌペとの社会関係を壊すため、収穫時期の放牧活動にはより一層の注意が必要である。より注意深い放牧を行うため、牧童の数を増やし、牛群を小さく分割する。これらの要素を、自然及び人間環境の変化に応じて柔軟に調整する事で、遊牧民は時間及び空間の隙間にある限られた資源を活用している。

本研究は、農村地域コミュニティが農業の内発的発展のためにローカル・イニシアティブを推進させ、自らの生産システムを多様化させ、自然資源の需要を確保したことを証明した。アフリカの小農は、革新に無反応で、変化を躊躇するものであるとしばしば決めつけられるが、詳細なフィールドワークによって得られた証拠からは、彼らには自然及び人間環境の変化に対して、土着的な解決策を生み出す能力がある事が証明された。これらのローカル・イニシアティブは、農村地域コミュニティのベースから作り出すものである。それは、人間と自然の間における長い年月を経て生み出された、注意深い観察と経験による土着的知識を反映したものである。ヌペ農民とフラニ遊牧民による資源管理と互酬関係の取り決めから示されるように、ローカルな農業的革新は地域の人々の生存維持志向やコミュニティ間の互惠関係を脅かすこと無く行われている。これらの原則は、外部からの援助を受けることが極めて稀なナイジェリア小農にとって特に重要である。本論文は最後に、二つの政策提言を提案する。一つ目に、科学的研究と改良技術の普及事業は、小農の生産活動において既に起きている変化を捜し出し、ローカル・イニシアティブの一番良い箇所を活かしていくべきである。二つ目に、開発政策担当者はアフリカの農村地域経済の多様性、柔軟性及び人間的性質を考慮した上で介入戦略を決定するべきである。